

Paris le 26 août 2013

パリクラブのみなさん

パリは8月中旬を境にすっかり秋の気候になりました。朝晩が涼しく、昼は暑いというパターンです。ヴァカンスも終わりみなパリにもどりはじめ街も活気が出ています。恒例の社会党の夏季大学(ラ・ロッシュェル)も昨日で終わりました。

今回はフランスの高等教育の競争力について少し深く書きました。グランゼコールと大学との高等教育二元性を持つフランスはEUの大学改革で特殊な問題を抱えています。社会党の夏季大学でもフランスの大学、研究、教育の重要性を訴えていましたが、伝統ある高等教育機関をどうEUに合わせていくか見ものです。

本文末に私が撮影した ENA パリ校の写真を掲げます。

綿貫健治

パリ通信(6)

フランスのエリート教育が危ない(Hors de France, point de salut pour l' élite)

エリートという言葉はフランス語の選ぶ「エリール (élire)」という言葉から生まれた。もともとラテン語の「神に選ばれた人」の意味であったが、現代のフランスでは「非常に難しい試験で選ばれ、一生、一流キャリアの身分が約束された人」という意味合いが強い。グランゼコールのトップ校国立行政学院 ENA や理工科学校エコール・ポリテクニク出身者がいい例である。もちろん、その頂点にあるのは ENA である。

既に実績のあるポリテクニクと違い、戦後にできた ENA にはもともとはそんな保障はなかった。戦争直後の混乱期に臨時政府首相ド・ゴールがドイツに癒着していたエリートや各省の勝手な高級公務員採用を嘆き「高級官僚採用

の民主化」を目的とするE N Aを作った。ド・ゴールの命を受けて、友人で後に首相になるミッシェル・ドブレ、連立政権で公務員担当国務大臣になるモーリス・トレーズの3人で設立した。2人ともレジスタンス仲間ではあるが、トレーズは当時「ソ連の長女」と言われた共産党の党首、スターリニストで、彼が設立にかかわっていたことがすでに民主化を象徴するものだった。しかし、その後の発展は「民主的なエリート」を作る学校から「貴族的なエリート」を作る方向に発展して世間の批判を呼んでいる。

フランス人のエリート批判好みもあり、毎年、バカロレアのシーズンになると必ず出てくるのがフランスのグランゼコール批判である。そこに便乗するのがエリートにかけては先輩国のイギリスとエリート崇拜の日本である。フランス人がエリート批判するのは理由がある。中世には教会に、近世には王室制度下で苦勞し、共和制移行後にはE N A・ポリテクニクを頂点とするグランゼコール出身の権力の下での生活が続いている。1960年代に社会学者のピエール・ブルデューがE N Aを「エリートの再生産システム」と批判したが当を得た発言であった。政治家にも非エナルクでE N Aを批判した人も多い。庶民派出身の偉大な政治家ミッテラン大統領もその一人で、当時の女性首相クレソンがその意をくんでE N Aをストラスブールに移し、前首相のサルコジは席次順の就職などの廃止を求めてE N Aを改革しようとして失敗した。

今年も例年と同じようにイギリスのフィナンシャル・タイムズ（2013年5月10日号）がE N Aを中心とするグランゼコールの批判に火をつけた。タイトルは「The French elite:where it went wrong」でサブタイトルが「France’ s “enarques” weren’ t trained to succeed in the world but in central Paris」とフランスのグランゼコールシステムとE N Aの非国際性を痛烈に批判した。さすがに気になったのか、フランスのエリート紙「ル・モンド」（2013年5月14日）がそのフランス語訳を載せたが、そのタイトルが本稿の仏文タイトルである。E N A本校はすでにパリになく欧州議会のある国際都市ストラスブールにあり、現在の学長も非E N A（パリ政治学院）で女性（ナタリー・ゾワゾー女史）になり、E N Aの国際化など改革に努力しているのにもかかわらずである。

批判が出るのにも一理ある。国民生活に関係のある政治、経済分野で権力を持っている人たちはE N A、ポリテクニクを頂点とするグランゼコール出身者が圧倒的に多いからだ。ポリテクニクは第三共和政以来3人の大統領を出し、卒業生は政治分野だけで他の分野でも活躍している。1945年に設立さ

れたE N Aは、政治分野では第五共和政で現大統領オランドを含み大統領3人、首相7人、閣僚、地方知事、市長、企業では国営企業中心に活躍している人が多い。私も20年前にソニーからフランスに駐在したときには、ポリテクニク出身の社長と一緒にソニーブランドの浸透に汗を流した。やはり教養を含み日本にはない優秀さがあった。

日本全盛の時代の時でもあり時々E N Aの会合に招かれ講演した。しかし、うわさ通りのエナルクの頭脳明晰さと優秀さに感心しことがある。私の友人で国際評論家・大学教授の八幡和郎氏が自身のE N A留学体験を「フランス式エリート育成法—E N A留学記」にわかりやすく書いている。また、その他にも政治家や官僚を含みE N A出身の優秀な人もいる。しかし、最近の日仏関係では伝統的グランゼコールとの学生交流が低調でポリテクニクでは日本人留学者がいなくなり、アジアからは中国人留學生が多くなったとのことである。

グランゼコールを批判した本も毎年出る。最近ではグランゼコールで教えた人や学んだ人の体験記が多い。イギリス「タイムマガジン」の記者で編集者のピーター・ガンベル (Peter Gumbel) もその一人で、E N Aの登竜門であるパリ政治学院で教鞭をとった体験を「エリート・アカデミー (Élite Academy)」(Denoël、2013)に書いている。ガンベルによると、E N Aの卒業生が活躍する以前はポリテクを中心とする有名5大グランゼコール出身者がフランス主要大企業幹部の80%を占め、そのうち42%がエコール・ポリテクニクという時代があった。しかし、E N Aの卒業性が幹部年齢に達し、商業系ビジネススクールが実力を持ち始める1980-90年頃に向けグランゼコール出身者の多様化が始まった。最近では、主要大企業幹部ではポリテクニクとE N A出身者が約50%、その他商業系の高等商業学院HECなどのグランゼコールが25%とグランゼコール出身が依然強い影響力を持っている。

最近の企業幹部の調査も紹介している。一部上場会社CAC40の幹部546人の出身校調査ではグランゼコール出身者が84%、その内ポリテクニク、E N A、HECの3校で約半分の46%を占めるとの結果が出た。まさにブルデューが言うように、グランゼコールは少数精鋭主義の「エリートの再生産」システムとなり、その高級キャリア身分保障から「国家貴族 (La noblesse de l'Etat)」と呼ばれるようになった。しかし、毎年全大学入学者全体の5%といたごく少数しか入学させず、一部のグランゼコールでは公務員給与を支払うなど国家負担も大きくなり従来のエリート教育制度が限界にきていることも事実である。E N Aが特に批判されるのは卒業生のほとんどが政治家・官僚と

して権力を持つのに対して、ポリテクニクの卒業生はバランスよく散らばっていて政治家・官僚になるのは4分の1だからである。特に、2012年に誕生した社会党政権は庶民の政権にもかかわらず、オランダを筆頭に閣僚だけでなく政府関係者にENA、グランゼコールが多いので批判の対象になっている。

グランゼコールは悪い面だけでない。歴史的に国家、経済の発展に貢献してきた。しかし、今回はグランゼコールを中心に現代の世界でフランスの高等教育は国際競争力があるのかを考えてみたい。結論を先に言うと、フランスはグランゼコールとユニヴェルシテ（大学）という高等教育二元性をとっていて、「フランスのエリート教育は世界の潮流から外れ制度も含めて危うい段階に来ている」のである。高等教育の国際性は前回に紹介した世界経済フォーラムWEFの国際競争力レポートが役に立つ。

マクロベースの高等教育競争力指標「高等教育と研修」をみると、2008-9年にフランスは世界の16位であったが2012-13年に27位に落ちている。エリート教育先輩国のイギリスも18位から16位と多少上がったが高くはない。日本は国際化と教育改革が遅れ23位から21位とフランスよりちょっと良いレベルで、反対に今EUで注目され評価が高いのは実はエリート教育を前面に出していないドイツなのである。ドイツは敗戦と占領化の経験から人材育成に日本より力を入れ国際化のみならず特に企業連携、イノベーションの具体化、実践的な実務学に力を入れ総合競争力を高めこの2年間で21位からなんと5位へと大躍進した。やはり大学がどれだけ経済成長力や国際性を持ち、経済やビジネスに直結した力を持っているかが見られている。

さらに国際競争力を具体的に大学別に調べるには世界大学ランキングがいい。世界の二大ランキング機構はタイムズ・ハイヤー・エデュケーション（THE）社とコッカレリ・シモンズ（QS）社であるが、両機構とも信頼できるランキングを発表しているが、イギリスに本部を置く民間機関である点留意が必要だ。THEで調べるとフランスのグランゼコール・大学はイギリスの大学より競争力がない。THEの「世界大学ランキング2012-13」によるとフランスの学校は上位100位以内に4校、200位以内に7校しか入っていない。同じ200校以内に29校入っているイギリス、75校入っているアメリカなどのアングロサクソン系大学と比べるとかなりの差がある。理由は後述する。

100位以内のフランス4校の内訳はグランゼコール2校、大学2校である。残念ながら50位以内に1校もなく、59位の高等師範が最高で、続いて62

位にポリテクニク、81位にパリ大学（ピエール・マリー・キュリー）、92位はパリ大学（南校）である。グランゼコールの頂点であるENAは入っていない。イギリスは100位以内に9校入っていてしかも2位にはオックスフォード、7位にケンブリッジと上位で旧植民地、英連邦をはじめ世界の優秀な人材を集めている。

もう一つの「世界大学ランキングQS」ではもっと厳しく、フランスは100位以内に2校で34位に高等師範、41位にポリテクニク、129位にパリ大学（ピエール・キュリー）である。ちなみに、総合的な競争力のあるドイツは大学別のランキング（THE）でも競争力を付けてきた。100位以内ではフランスと同じように48位にミュンヘン大学、70位にゲッチンゲン大学、78位にハイデルベルグ大学、99位にフンボルト大学と4大学が入っているが、200位以内にはフランスより多い11校が入っている。やはり、前述したように実践的なイノベーション志向、企業提携の促進、工業の発展、経済成長への直結などの理由と思われる。

しかし、同じフランスのグランゼコールでも国際化に大成功し大学世界ランクの高い分野もある。それはビジネススクールでフィナンシャル・タイムズ（FT）の「2013年度ビジネススクール国際ランキング」では世界のトップ100校の内6位にINSEAD、21位にHEC、92位にEMLLYONの3校が入り、イギリスの12校には及ばないが健闘している。また、別の尺度を使った「2012年欧州ビジネススクールランキング」では2位に長年トップだったHEC、4位にINSEAD、10位にESCP・EUROPEなど多くのフランスビジネススクールが入っている。

ちなみに、世界トップ100校ランキングに日本のビジネススクールは一校も入っていない。フランスのビジネススクールは、その生い立ちからグランゼコールでも後発で商工会議所や企業など民間主体が協力して設立され学校が多い。そのため時間がかかったが、努力の甲斐があり3大国際認定証（AACSB, EQUIS, AMBA）を取るなどグローバル化、アメリカ化を進めいち早く世界のトップクラスに持っていった。

ようするにフランス高等教育に関してはグローバル化のために「フランスの物差し」と「世界の物差し」が違ってきていて、フランスは「フランス的例外」の一つになりつつある。ビジネススクールのように物差しを変えればフランス

もトップクラスに上げられる実力があるのもったいない。フランスはメートル法など世界の標準化をリードしてきたが高等教育に関しては後れを取っているようだ。特に大学ランキングの物差しは、国際性、企業連携・収入、研究成果、論文引用、大学のアカデミック評判などのアカデミックスケールによるので、実学を重要視するグランゼコールは不利である。また、フランスの大学は医学、自然科学に比べると文化系の研究論文が少なく、研究論文の多い公的、私的研究所は大学付属でなく国家や私的機関に属しそれも産業界との連携が少ない。一流ジャーナルにのる英語で書かれた論文も少なく、また、伝統的にグランゼコールと大学という「高等教育二元制度」をとっているため、パリなど大都市にある一部の大学を除くと、大学・グランゼコール間には組織や環境それにアカデミックの差が大きく、EUの求める国際化や標準化に後れを取っている。

フランスの大学の歴史は古く12世紀以来大学の伝統があるので優秀なグランゼコール・大学も多い。現在、フランス全体には3500校の高等教育機関があり、大学が83校、グランゼコールが225校、その他の中小の高等教育機関を入れると3000あり多すぎる。研究所も1200あるが国、地方自治体、国に属しているので評価の対象になりにくい。高等教育はOECD平均の公的教育支出・国内総生産比1%より多い1.2%を費やしているが多くはない。しかし、グランゼコールが大学より多く、大学も施設やスタッフが十分でなく数の上で劣っているのが現状である。特に移民の多い郊外の大学では環境が悪く時々暴動騒ぎになる。また、グランゼコールでのトップ校はグランゼコール全体の1割の20校と言われ、それも、FTが言うようにパリに集中し地方校との差があるのも問題である。

高等教育改革もそれなりに進んでいるが進み方が遅い。パリ大学医学部から発展した1968年の暴動以来様々な高等教育改革が行われた。1968年の高等教育基本法（エドガー・フォール法）、1984年の高等教育法（サヴァリ法）、1988年の「新教育基本法」（ジョスパン法）、2006年の研究プログラム法で「知の序列化」から「知の多様化」、「閉ざされた大学」から「開かれた大学」への転換、「大学自治の拡大」など高等教育の行政、教育、研究、自治の基本的フレームワークが進んだ。しかし、フランスの高等教育改革を一気に進めたのは、実は中からでなく外からの力であった。

1999年にEUの大学教育課程共通化する欧州高等教育研構想「ボローニャ協定」が結ばれ、その後10年間の方針である「ボローニャプロセス」がフランスの国際化、標準化を急速に進めた。2002年に始まった大学3年、修

士2年、博士3年（LMD）制度の採用をはじめ、欧州大学間単位互換制度（ECTS）の導入、学生間の積極的交流などが促進された。しかし、これらの先進的提案はフランスのジャック・アタリと大学関係者を中心とした将来提言がベースになっているらしい。皮肉なことである。

また、2007年にはサルコジ前大統領が大学競争力強化を重んじて導入した「大学の自由と責任に関する法（LRU）」がフランス国際化を一步進めた。新自由主義者のサルコジは本気で競争力改革を考え、大学学長の権限を強くし意思決定の自立化を進め自由裁量を増加することによってフランス高等教育を世界の一流にするつもりであった。具体的には運営協議会の単純化、予算の独立、人事の自立、評価の強化、複数年契約、研究・高等教育拠点整備などを規定した。

しかし、改革にはいつも反対がともなうし、新政権は過去の否定から始まる。高等教育の急速な自治化や民営化を恐れた伝統派が抵抗したことと、反対勢力の中心である教員労働組合を背後に持つ社会党政権が成立したことで真の改革はなかなか進みにくい。現に、オランド大統領はサルコジ前大統領が掲げた高等教育政策「競争性（compétitivité）」よりも「協力性（cooperation）」の戦略をとり多少トーンが下がっている。国際政策よりも学生の学士号取得率の改善、学生生活レベルの向上、大学の自由・責任に関する法律の修正、地域格差の是正、研究支援改革、EU圏外留学生への制限緩和など国内政策に重点を置いている。一歩ずつ進めようという慎重さが見えるが世界の動きは早い。

フランスの高等教育を追っていくと日本との共通点が多いことに気づく。日本人あるいは日本の高等教育機関はフランスと同じようにどちらかと言うと「競争嫌い」で伝統的な教育制度にこだわり長年国際競争を横から眺めていた。安倍政権の誕生で数字を含めた成長戦略がとられ初めて高等教育の競争力強化を唱えられた。「今後10年間で世界ランキングトップ100に我国の大学10校以上にする（現在2校）」と発表され、私みたいに大学競争力強化を進めてきたものには頼もしく感じる。しかし、民間が主で進めた経営大学院（MBA）の国際化はフランスの方スピードが速く日本は遅い。日本のビジネススクールで国際認定を受けている大学はごく少数である。

私も大学での教職以外に日本の競争力強化に貢献しようと思ひ、縁があつて過去5年間前述の世界大学ランキング機関QSが主催する「アジア・パシフィック国際教育者会議（QS-APPLE）」の運営委員をしていた。しかし、

その活動で見たのは中国、韓国、中近東・アフリカの新興勢力が官民をあげてランキング入りを目指しているのに比べると日本の大学の参加者を始め興味や熱意は弱いと感じた。また、チェアしていたセミナーの参加者の意気込みと目の輝きもすごかった。中国は上海交通大学が独自の世界大学ランキングを始め、先のFTグローバル・ビジネススクールランキングにも国際認定を受けた大学が6校入っている。やはり、政府の強いイニシアティブと競争力強化を進める人材の育成は一緒に進める必要がある。

私は現在、横浜国大の学長特別補佐として大学の国際力強化をお手伝いしながら世界の高等教育業界の動向を調べ、またイベントに参加している。その一環として私の思い出をトレースするために冒頭にあったエリートのシンボルであるパリENA分校を訪れてみた。大分前に訪れた時にはサンジェルマン・デブレ近くのサンペール通りからユニヴェルシテ通りに移っていたが、今回は完全にパリ政治学院のビルになっていた。なくなるとさみしいもので行く先を探すと、ENAパリ分校は2007年からルクサンブール公園の前のアヴェニュー・ロブザバトワール通り（6区）に移動していた。



パリ6区ルクサンブール公園のそば、2, av. de l'Observatoire にひっそりと建つENAパリ校。近所にエコール・ド・ミーヌ、パリII (ASSAS)薬学部、リセ・モンターニュなどあり、アカデミックな雰囲気が濃厚に漂う。



元の国立植民地大学の施設を改良したものであまり外からは目立たないが立地は良く歴史を感じる建物だった。過去においてはナポレオン3世の時代に植民地を管理するリーダー養成校として建てられたが、現在はパリオフィス機能以外に公務員や企業幹部の研修を行っている。入り口の担当の人がくれたパンフレットに「ENAはフランス、ヨーロッパ、世界の要求に答える実践的な学校である」と書いてあった。

その目的から考えると、いろいろ反対もあったがENAが欧州議会のあるストラスブールに移ったのは正解ではなかったかと思う。いずれ、ENAを始めとするフランスのグランゼコールも「物差し」を変えて評価を得て、EU政府や議会、グローバル企業や国際的で活躍する人材を多く輩出するようになるだろう。

(2013年8月15日)